

二国間交流事業 セミナー報告書

令和6年1月31日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
学校法人慶應義塾 ・ 慶應義塾大学大学院メディア
デザイン研究科
[職・氏名]
教授 ・ 南澤 孝太
[課題番号]
JPJSBP220233604

1. 事業名 相手国: ドイツ (振興会対応機関: (DFG)) とのセミナー

2. セミナー名

(和文) 人々を繋ぐ「デジタルメディアを介したソーシャルタッチ」を総合知で探求する

(英文) Mediated Social Touch : Interdisciplinary Exploration of Digital Touch to Connect Humans

3. 開催期間 2023 年 10 月 15 日 ～ 2023 年 10 月 18 日 (4 日間)

4. 開催地(都市名)

東京・Tokyo、箱根・Hakone

5. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

RWTH Aachen University ・ Junior Professor ・ Yamamura Sakura

6. 委託費総額(返還額を除く) 2,500,000 円

7. セミナー参加者数(代表者を含む)

	参加者数	うち、本委託費で渡航費または 日本滞在費を負担した場合*
日本側参加者等	18 名	0 名
相手国側参加者等	12 名	0 名

参加者リスト(様式 B2)の合計人数を記入してください。該当がない箇所は「0」または「-」を記入してください。

* 日本開催の場合は相手国側参加者等の日本での滞在費等を負担した場合、相手国開催の場合は日本側参加者等の渡航費を委託費で負担した場合に記入してください。

8. セミナーの概要・成果等

- (1) セミナー概要(セミナーの目的・実施状況。第三国からの参加者(基調・招待講演者等)が含まれる場合はその役割とセミナーへの効果を記載してください。関連行事(レセプション、見学(エクスカーション)その他会合(別経費の場合はその旨を明記。))などがあれば、それも記載してください。委託費総額の50%に相当する額を超える費目間流用については、その変更理由と費目の内訳を変更しても計画の遂行に支障がないと考えた理由を記載してください。)

本ワークショップでは「デジタルメディアを介したソーシャルタッチ」(Mediated Social Touch)をテーマとして、ドイツおよび日本の両国における最先端の学術的知見を集約し、今後のグローバル社会における触覚技術の社会的コミュニケーションインフラとしての展開可能性と課題、および本研究領域における今後の二国間の共同研究の可能性を模索するため、ハプティクス、社会科学、心理・神経科学、工学、デザイン、データ科学など多様な分野の専門家および、同テーマに関連する研究に取り組む博士課程学生および若手研究者ら計 29 名参加した。

フィールドワークを兼ねたランチレセプションとして、障害当事者が自宅からロボットを用いて就労する新たな働き方の実証実験施設である「分身ロボットカフェ DAWN ver. β」を見学訪問し、日本における先進的なインクルーシブデザインの社会実装の取り組みをドイツ側参加者とともに体験したのち、2023 年 10 月 15 日から 17 日の 3 日間にわたり箱根ライムリゾートにて、合宿形式の研究ワークショップを開催した。まず本会の企画にあたった南澤(慶應義塾大学)、Sakura Yamamura(RWTH Aachen Univ.)、Nora Kottmann(DIJ ドイツ日本研究所)より、開催趣旨および Mediated Social Touch に繋がる諸領域の研究動向について紹介したのち、Digital Touch to Connect Humans, Perceptions & Emotions with Touch, Haptics for Diverse & Inclusive Society, Social Haptics & ELSI, Design Implications の 5 セッションにおいて両国から計 18 件の研究講演を行い、またナイトセッションとして、参加した若手研究者および博士課程学生から計 6 件の研究紹介を行った。合宿後にはエクスカーションとして、箱根彫刻の森美術館を訪問し、同館の学芸員による特に触覚や身体性と関連する作品の紹介を得た後、屋外に彫刻作品が展開される同館を自由散策し、参加者の親睦を深めた。

ワークショップで行った議論を踏まえ、翌 10 月 18 日、ドイツ文化会館(OAG Haus)にてシンポジウム「Mediated Social Touch. Interdisciplinary Exploration of Digital Touch to Connect Humans」を開催した。本シンポジウムでは、両国からの参加者による講演に加え、研究開発が行われている触覚コミュニケーション技術の実演展示や、ドイツ側からの参加デザイナーが取り組んでいる触覚デザインの実例紹介を行った。さらに、科学研究費補助金・学術変革(B)「デジタル身体性経済学の創成」の協力のもと、美学・哲学者である伊藤亜沙氏をゲストスピーカーに迎え、ワークショップ参加者とともにパネルディスカッションを実施した。このシンポジウムには約 80 人が参加し、活発な議論を行い今後の共同研究に向けた展望を共有することができた。

- (2) 学術的価値(セミナーにより得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

3 日間にわたるワークショップでは、「Digital Touch to Connect Humans」、「Perceptions & Emotions with Touch」、「Haptics for Diverse & Inclusive Society」、「Social Haptics & ELSI」、「Design Implications」という 5 つのテーマについてディスカッションを行い、Mediated Social Touch に関する分野横断的な共通の定義を明

確にし、どのように焦点を当てるべきかについての方針を整理した。その結果、この新たな分野を展開することの利点やリスクを整理することができた。この成果は触覚研究の国際会議である Eurohaptics2024 に投稿し、分野を横断する研究者たちがこのテーマに取り組む意義を共有する予定である。

(3) 相手国との交流(両国の研究者が協力してセミナーを開催することによって得られた成果)

COVID-19 の世界的大流行や紛争問題などを通して立ち上がってきた課題の認識、および両国における Mediated Social Touch の潜在的価値や今後の展開への期待を共有した。また、日本での分身ロボットカフェ DAWN ver. β の取り組みを直接体験してもらうことで、技術による障害者の社会参加の意義を確認することができた。さらに、ドイツ文化会館でのシンポジウムには、前日までのワークショップ参加者以外の様々な国籍の幅広いバックグラウンドの人々が参加し、我々の取り組みについて多様な視点からの意見を得た。

(4) 社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

Mediated Social Touch 技術が両国の社会生活にもたらす潜在的な変化について議論した。この技術は、人々の生活の場面において、例えば、仕事、移住、病気などで遠く離れた家族や友人との感情的なつながりをサポートするコミュニケーション技術としての展開が考えられる。また、よりパブリックなプラットフォームとして、社会的なコミュニティにおいて Mediated Social Touch をインフラストラクチャーとして導入することにより、人々の結びつきを強化する空間設計を行える可能性も示唆され、未来の社会における私的公的両面での貢献の可能性が活発に議論された。

(5) 若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本セミナーでは2日目の夜に博士学生や若手研究者が自分の研究を紹介するトークセッションを実施した。6名の若手研究者が各々取り組んでいる研究について発表し、そのあとの交流会にてシニア研究者からのフィードバックや研究におけるアドバイスを得ることができた。合宿形式として開催を行えたため、セッションの合間や食事の時間も含め、常に活発な交流が行われる場を創出することができ、若手研究者に対してシニア研究者の学問的探求に対する強い好奇心と情熱を伝えられたのではないかなと思われる。

(6) 将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

継続的な交流および課題の議論を促進するために、ドイツ研究財団(DFG, German Research Foundation)に対してプロジェクトの延長を要請し、採択を得た。これにより、2024年6月の Eurohaptics2024 の開催に合わせて、ドイツにて第二弾のワークショップの開催を計画している。同時に、プロジェクトを長期的に継続するために、日本学術振興会の科学研究費助成金の国際共同加速基金などの公募にも応募を検討している。

(7) その他(上記(2)～(6) 以外に得られた成果(論文発表等含む)があれば記載してください)